

平成18年度病害虫発生予報第5号

平成18年7月6日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要 [参考]

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量	
普通作物	イネ	葉いもち	平年並	平年並	
		穂いもち	やや遅い	平年並	
		紋枯病	平年並	やや多い	
		縞葉枯病	平年並	平年並	
		(ヒメトビウンカ)			
		セジロウンカ	やや遅い	やや少ない	
果樹	ナシ	斑点米カメムシ類	やや遅い	やや多い	
		黒斑病	-	平年並	
		黒星病	-	平年並	
		輪紋病	平年並	平年並	
		クワコナカイガラムシ	やや遅い	やや多い	
		ハダニ類	平年並	平年並	
	リンゴ	シンクイムシ類	平年並	多い	
		炭疽病	平年並	平年並	
		ハダニ類	平年並	平年並	
		カメムシ類	平年並	多い	
野菜	ネギ	果樹共通	平年並	多い	
		さび病	平年並	平年並	
		黒斑病	平年並	やや多い	
		白絹病	平年並	平年並	
		軟腐病	平年並	平年並	
		ネギハモグリバエ	平年並	平年並	
	スイカ	ネギアザミウマ	平年並	平年並	
		つる枯病・炭疽病	平年並	やや多い	
		うどんこ病	平年並	やや少ない	
		褐色腐敗病、疫病	平年並	平年並	
		アブラムシ類	やや遅い	平年並	
		ハダニ類	やや遅い	平年並	
イチゴ	うどんこ病	平年並	平年並		
	炭疽病	平年並	平年並		
	アブラムシ類	やや遅い	やや少ない		
	ハダニ類	平年並	平年並		
ナガイモ	炭疽病	平年並	平年並		

気象予報 (抜粋)

1か月予報(7月1日~7月30日:6月30日、広島地方気象台発表)
向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並が多く、日照時間は平年並でしょう。

<可能性の大きな気温経過>

期 間	平均気温
7月 1日 ~ 7月 7日	平 年 並
7月 8日 ~ 14日	平年並か高い
7月15日 ~ 28日	平 年 並

普通作物

[イネ]

1 葉いもち

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平 年 並
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 6月第6半旬に行った置き苗の定点調査では、発病か所率（置き苗発病ほ場数 / 調査圃場数×100）は1.6%（平年4.0%）と少ない発生であった。

イ 7月4日現在、中山間地の一部ほ場で発生がみられているが、広域的な発生とはなっていない。

ウ プラストム（いもち病発生予察システム）による感染好適日が6月23日および7月1日に広域的に認められた。

エ 県発生予察ほ場におけるイネのでんぷん蓄積率は平年並である。

オ 気象予報によると、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並と予想されている。また、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、本病の発生に好適である。

カ いもち病に弱い「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」の栽培面積が約90%を占めている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 補植用置き苗を放置しているほ場では、置き苗を直ちに処分する。

イ 長期効果持続型育苗箱施用剤を使用しているほ場でも、山間地、常発地などでは十分な効果が得られない場合があるため、ほ場の観察を徹底し、早期発見に努める。

ウ 上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、直ちに粉剤、水和剤等で防除を行う。

エ 降雨が続く場合でも、雨の止み間に防除を行い適期を失しないようにする。（粉剤散布後3時間程度降雨がなければ防除効果は十分にある）

2 穂いもち

(1) 予報の内容

発生地域 早期栽培地域
発生時期 やや遅い
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、イネの生育ステージは2~3日遅れており、出穂も2~3日遅れる見込みである。

イ 葉いもちの発生量は平年並と見込まれる。

ウ 気象予報によると、出穂期から穂揃い期にあたる7月下旬は、晴れの日が多いと予想されており、平年と同様に本病の発生を助長しない。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 予防防除を基本とし、粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期および穂揃い期に防除を行う。粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う。

イ 葉いもちの発生に注意し、ほ場をよく観察して早期発見に努め、上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、直ちに粉剤、水和剤等で防除を行う。

3 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア イネの茎数は平年並である。

イ 昨年の発生量は多く、越冬菌核量は多いものと推測される。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、本病の発生に助長的である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幼穂形成期から出穂直前までに1～2回の防除を行う。なお、コシヒカリでは出穂期前15～20日の発病株率が25%、穂ばらみ期の発病株率が18%を要防除の目安とする。

イ 昨年発生が多かったほ場では、特に注意する。

4 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、予察灯へのヒメトビウンカ誘殺数はやや多い。

イ 昨年の本病の発生は少なかったため、伝染源は少ないものと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 縞葉枯病の常発地でヒメトビウンカに対して効果の高い薬剤の育苗箱施用を行っていない場合には、防除指針等を参考にして7月上旬にヒメトビウンカの防除を行う。

イ 本虫は葉色の濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないようにする。

5 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや遅い
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 予察灯における初飛来は6月24日(平年:6月19日)で平年と比較してやや遅い。

イ 6月第6半旬現在、予察灯の誘殺数は少ない。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いと予想されており、本虫の発生を助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、梅雨前線の活発化に伴い多飛来も予想されるので、ほ場における生息密度及び発生予察情報に注意する。

イ 防除適期は、7月中～下旬になるものと予想される。この時期の防除要否の目安は1株当たり成幼虫が10頭以上である。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 早期栽培地域

発生時期 やや遅い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、イネの生育ステージは2～3日遅れており、出穂も2～3日遅れる見込みである。

イ 県東部の定点雑草地では、斑点米カメムシ類の発生は平年に比べてやや多い。

ウ 6月第6半旬現在、アカスジカスミカメの予察灯への誘殺数は平年に比べて多い。

エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いと予想されており、本虫の発生及び加害をやや助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂20日前頃に草刈りを行ない、その後、イネ科雑草が穂をつける前に再度刈り取りを行う。草刈りは地域で一斉に行うと効果が高い。なお、出穂期前後に水田周辺の雑草地・畦畔等の草刈りを行うと、雑草地等で増殖したカメムシ類を水田に追い込む結果となるので避ける。

イ 水田及び周辺雑草地にカメムシ類の発生が多いほ場では、穂揃い期～乳熟初期に防除指針に従って薬剤防除する。その後も発生の多い場合は、7～10日間隔で追加防除を行う。

ウ 昨年、斑点米の発生が多かった地域では斑点米カメムシ類の越冬密度が高い可能性があるので注意する。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月12日に調査した幼果の除袋調査の結果によると、県内の平均発病率は0.4%(平年:2.9%)であった。また、徒長枝葉の平均発病率は0.4%(平年:1.3%)であり、いずれも平年を下回った。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されており、今後、新梢葉の発病の増加が予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期間中の降雨により徒長枝葉の発病が増加するので、梅雨明けまでは防除間隔を7～10日とし、徒長枝葉の発病の多い園では追加防除を1～2回行う。

- イ 防除薬剤は、アントラコール顆粒水和剤500倍液、アリエッティC水和剤800倍液、アミスター10フロアブル1,000倍液などを使用する。
- ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地における本病の発生量は平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されており、今後、葉や幼果の発病はやや増加すると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期間中の降雨により発病が増加するので、梅雨明けまでは防除間隔を7~10日とし、発病の多い園では追加防除を1~2回行う。

イ 防除薬剤は、ベルコートフロアブル1,500倍液、アミスター10フロアブル1,000倍液などを使用する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 伝染源は枝のいぼ病斑であり、ナシ園によっては発生の多いところがある。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されており、今後、孢子飛散数の増加が予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実の発病は有袋栽培でほぼ防げるが、袋掛けが遅くなると発病が多くなるので早めに袋掛けを行う。また、無袋栽培では梅雨明けまでの薬剤防除を徹底し、追加防除を1~2回行う。

イ 防除薬剤は、ベルコートフロアブル1,500倍液、キャプレート水和剤600倍液、アリエッティC水和剤800倍液、オキシラン水和剤600倍液、アミスター10フロアブル1,000倍液などを使用する。

4 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 第1世代幼虫のふ化初日は、平年よりやや遅い7月6日頃(平年:7月3日)と見込まれる。

イ 前年度は、本害虫による果実被害はやや多かった。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発園では次の時期を目安に2回の防除を行う。

幼虫ふ化最盛期 7月 8~13日

幼虫ふ化終期 7月 14~19日

少発園では7月10日前後に1回防除を行う。

- イ 薬剤はスミチオン乳剤1,500倍液、モスピラン水溶剤4,000倍液、ダズバン水和剤25の1,500倍液などを使用し、連用を避けて輪番散布する。
- ウ 薬剤の散布に当たっては、カイガラムシが集合する枝葉の他、枝の切り口、粗皮などにも十分にかかるようにする。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、県予察圃場におけるカンザワハダニの1葉当たりの寄生虫数は、0頭(平年:0頭)となっている。
- イ 網掛け栽培を中心に、ハダニ類の密度が増加しているほ場が一部認められる。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。
- イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。
- ウ カンザワハダニ、ナミハダニにはバロックフロアブル2,500倍液、コロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液などを、クワオオハダニには前述の剤に加えて、ダニトロンフロアブル1,500倍液などを使用する。
- エ ナシ園の小草は、ハダニの発生源となるので草刈を励行する。

3 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	多い

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数は多い。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高いと予想されており、ナシヒメシンクイの第3回成虫の発生最盛期は平年並の7月下旬頃、モモシンクイガ第2回成虫の発生最盛期は平年並の8月中旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 7月以降は、断続的なシンクイムシ類の発生が見込まれるため、発生が多いほ場では、定期的な薬剤防除により発生密度を低減する。
- イ 薬剤はモスピラン水溶剤4,000倍液、ダズバン水和剤25の1,500倍液、スミチオン乳剤1,500倍液、DDVP乳剤1,000倍液などを使用する。
- ウ 受粉樹に残っている果実はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

[カキ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 現地における本病の初発生時期は、ほぼ平年並であった。
- イ 本病は枝幹部に形成された病斑で越冬し、発病樹では常発的に発生が認められる。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は、平年並が多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除薬剤は、7月上～中旬にジマンダイセン水和剤600倍液またはペンコゼブ水和剤600倍液を使用する。
- イ 新梢や幼果の発病は降水量と関係が深く、10日間の雨量が100ミリ以上に達すると発病が増加する。
- ウ 発病が認められた新梢や幼果は除去して、園外に持ち出す。

[リンゴ]

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、平年並の発生量となっている。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。
- イ 薬剤は、オサダンフロアブル2,000倍液、ダニトロンフロアブル1,500倍液、コロマイト乳剤1,500倍液などを散布し、連用を避けて輪番散布する。
- ウ リンゴ園の下の草は、ハダニの発生源となるので草刈を励行する。

[果樹共通]

1 カメムシ類(平成18年5月11日付,病虫害発生予察注意報第2号発表)

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	多い

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、チャバネアオカメムシ、クサギカメムシの予察灯における誘殺数は平年並～やや多い。
- イ 越冬世代成虫の発生量が多く、カメムシ類の餌となるスギ・ヒノキの球果量がやや少ないと見込まれることから、8月までのナシ園への飛来量が多いものと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 例年、第1世代成虫が発生する7月下旬頃が果樹園への飛来量が増加する時期なので、定期的にはほ場を見回り、カメムシ類の飛来に注意する。ただし、多発生年の場合、7月上旬頃から果樹園への飛来量が増加した事例があるので注意する。
- イ カメムシ類の飛来が認められた場合は、ナシ、カキ、リンゴ、モモを対象としてジノテフラン水溶剤(アルバリンまたはスタークル顆粒水溶剤)2,000倍液、ナシ、カキ、リンゴを対象としてアグロスリン水和剤2,000倍液などを散布する。

野菜

【ネギ】

1 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、本病の発生量はほぼ平年並であるが、一部発生の多いほ場が見受けられる。

イ 本病は気温が24℃以上では発生が少なくなる。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、オンリーワンフロアブル1,000倍液などを散布する。多発している場合には、上記の薬剤にカリグリーン水溶剤800倍液を混用して散布するか、アミスター20フロアブル2,000倍液の散布を行う。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、本病の発生量はやや多い。

イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、発病の増加が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、ほ場の排水を図り、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリペリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

3 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 7月上旬の土寄せ前にモンカット粒剤の10a当たり4kgを株上から株元に散布する。または、モンカットファイン粉剤20DLの10a当たり10kg、フロンサイド粉剤10a当たり15kgなどを株元散布する。なお、粉剤は畝の両側から株

元に散布を行う。

イ 7月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液を株元に散布する。その後の発病には、土寄せ前にリゾレックス粉剤10a当たり20kgなどを株元散布する。

4 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギに傷が付くような無理な土寄せ、および追肥を行うと発病が助長されるので注意する。

イ 植付後2ヶ月以上経過し、収穫まで1ヶ月以上を要するものには、7月上旬の土寄せ直前に、オリゼメート粒剤10a当たり6kgを散布する。

ウ 最終土寄せ前後にナレート水和剤1,000倍液、Zボルドーまたはヨネポン水和剤500倍液を7~10日間隔で2~3回散布する。

5 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、発生量は平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤2,000倍液などを散布する。

6 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、一部で発生の多いほ場も認められるが、全体的に発生量は平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除薬剤は、ランネート45DF1,000~2,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍液、アドマイヤーフロアブル2,000~4,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000~2,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、オンコルマイクロカプセル1,000~2,000倍液などを7~10日間隔で散布

する。

イ 同一、同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、上記薬剤をローテーション使用する。

〔スイカ〕

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、つる枯病及び炭疽病の発生量はほぼ平年並である。

イ つる枯病および炭疽病は、降雨によって発病が増加する。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されており、発病の増加が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 雨滴のあたる箇所または株元から発病するので、薬剤散布は株元およびつる先にも薬液が付着するように丁寧に行う。

イ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を5～7日程度とし、雨のやみ間に防除する。

ウ 薬剤は、アントラコール顆粒水和剤600倍、ダコニ-ル1000の700倍液などを予防散布する。発病後は、ポリベリン水和剤1,000倍などを散布する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、本病の発生量はやや少ない。

イ 本病は、25 前後の気温と乾燥条件で発病が増加する。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期からトリフミン水和剤5,000倍液、ポリベリン水和剤1,000倍などを散布する。

3 褐色腐敗病、疫病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、褐色腐敗病および疫病の発生はほとんど認められていない。

イ 褐色腐敗病および疫病は、多雨によって発生が増加し、一度発生すると、急速に広がる。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場の排水を良好にする。特に豪雨時には滞水のないように配慮する。

- イ 毎年疫病の発生する圃場では、ジマンダイセン水和剤400倍液を予防散布する。
- ウ 多雨が続くとき、または集中豪雨の後にはリドミルMZ水和剤1,000倍液を散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）に設置した黄色水盤における有翅アブラムシ類の飛来量はやや少ない。

イ 現地定点ほ場における発生量は、一部やや多いほ場が見受けられるが、ほぼ平年並である。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、今後もやや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤はアドマイヤー水和剤2,000倍液、マラバッサ乳剤1,500倍液などを散布する。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）における発生量は平年並である。

イ 現地定点ほ場における発生量は、一部やや多いほ場が見受けられるが、ほぼ平年並である。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にはニッソランV乳剤の1,000～1,500倍液、マイトコーネフロアブル1,000倍液、オサダンフロアブル2,000倍液などを散布する。新たに発生が増加する場合や発生がやや多い場合は、コロマイト乳剤1,000倍液を散布する。

[イチゴ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、育苗床での本病の発生量は平年に比べてやや多い。

イ 発病適温は20前後である。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ばに病原菌を持ち込まないために、育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。発病初期までの薬剤は、ベルコート水和剤 1,000 倍液、サンヨール乳剤 1,000 倍液などを散布する。

ウ 発病が多発している場合には、トリフミン水和剤 5,000 倍液、モレスタン水和剤 4,000 倍液、サンヨール 1,000 倍液などを交互に散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、育苗床での発病はほとんど認められていない。

イ 本病は高温多雨で発病しやすい。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期間中、罹病性品種については、下記の薬剤を定期的に散布する。なお、薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、ランナーにも薬液が付着するように丁寧に散布する。下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。育苗初期の防除を徹底し、発病株は除去する。

イ 育苗初期は、保菌（潜在感染）している可能性があるため、アミスター20フロアブル 2,000 倍液、ゲッター水和剤 1,000 倍液およびバイコラル水和剤 2,500 倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルは薬害が出やすいため、展着剤を加用しない。

ウ その後の散布薬剤は、ベルコート水和剤 1,000 倍液、デランフロアブル 1,000 倍液、アントラコール顆粒水和剤 500 倍液、ジマンダイセン水和剤 600 倍液などを用いて、7～10日間隔で予防散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）に設置した黄色水盤における有翅アブラムシ類の飛来量はやや少ない。

イ 現地のイチゴ育苗床における発生量は平年に比べ少ない。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、やや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤はスミチオン乳剤 2,000 倍液、ベストガード水溶剤 2,000 倍液などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、イチゴ育苗床における発生量は、平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 畦畔雑草に対し、ハービー液剤200倍液を散布し、除草に努める。

イ 発生初期からニッソラン水和剤2,000倍液、オサダンフロアブル2,000倍液などを散布する。発生が多い場合はコロマイト水和剤2,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、本病の発生量はやや少ない。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並が多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 薬剤は、ベルコートフロアブルまたはダコニ-ル1000の1,000倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液などを予防散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.acis.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果などの指導情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所
〒680-1142 鳥取市橋本 260
TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647
E-mail : byogaichu@pref.tottori.jp 又は kttr0301@sp.jppn.ne.jp

次回の予報発表は、8月3日(木)の予定です。